

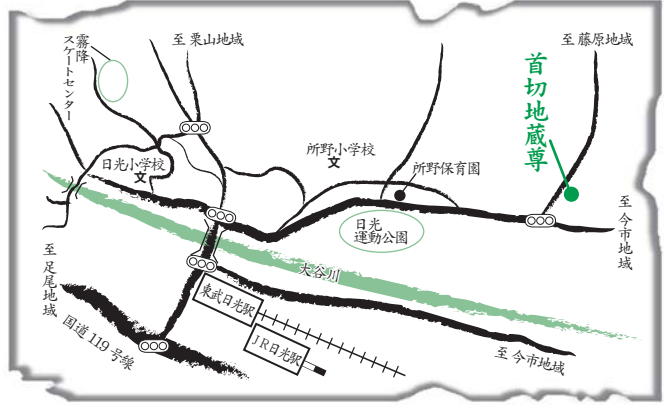
日光市の文化財 27

首切地蔵尊
(附)六地蔵尊・経塔



所野運動公園から県道を瀬尾に向かい、先の交差点を左折して約三〇〇メートル進むと、首切地蔵尊があります。近くには、六地蔵尊と妙法蓮華経と刻まれた経塔が建っており、これらも併せて文化財となっています。首切地蔵尊は、受刑者の霊を供養するために建立されたものとされており、六地蔵尊も生きとし生けるものの苦しみを救うといわれています。なお、首切地蔵尊の製作年は不明ですが、六地蔵尊には享保一三(一七二八)年の銘があり、これと同年代のものと考えられます。

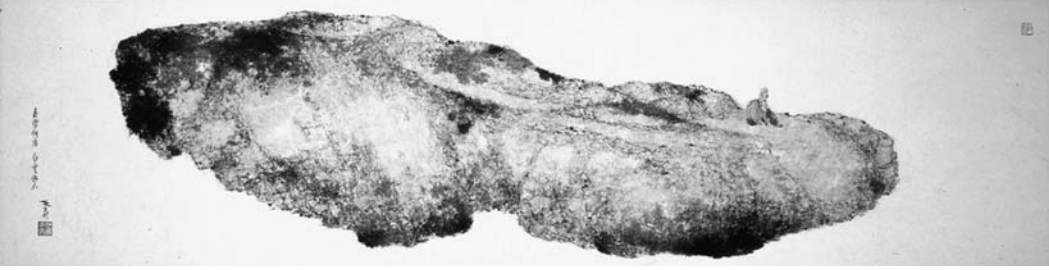
これらの文化財は、昔のまま保存されている点で貴重なだけでなく、当時の人たちが、受刑者に対して冥福を祈った思いやりを、私たちに伝えてくれています。



GALLERY ③

このコーナーでは、市で所有する絵画を紹介します。

「白雲幽石図」



小杉放菴作
1933(昭和8)年頃
紙本・着色
38.0cm×148.0cm
小杉放菴記念日光美術館所蔵

小杉放菴は、1930年に現在の新潟県 妙高市に安明荘と名付けた別荘を建て、晩年を過ごしました。庭には大きな岩があり、よくその上に腰かけては妙高高原を眺めていたといわれています。作品左側にある「庭際何有 白雲幽石」の文字は、中国の僧・寒山の詩を元にしており、「庭にあるものといえば、白雲のような岩だけだ」という意味です。石に愛着を持っていた放菴は、「石上人」という落款(作品に施す署名捺印)も用いています。

この作品では、横幅約1.5メートルという大画面いっばいに巨大な岩が主役として描かれています。雲のような、船のような形の岩からは不思議な浮遊感が感じられ、彼方へ広がる無限の空間へと導いてくれるかのようです。岩の上の老人は放菴自身でしょうか。放菴は雲の上から見渡すかのような気持ちで世の中を見つめていたのかもしれませんが。まさに脱俗の画家と称された、小杉放菴の境地を最もよく伝えてくれる作品だといえるでしょう。

市民文芸

川柳 選者 日野原元児

- 椅子とりの競技に向かう定期券 福田恒産
- 百円の傘で濡れずにすみました 手塚貴子
- 登山靴の呼吸を持ち帰る 大橋芳明
- 立ち合いの迷い見ていた仕切り線 吉田貴博
- 執着の心にそっとしゃぼん玉 新家守
- 孫と言う核爆弾がやってきた 小曾根光秀
- 脱ぎ捨てたはずの想いが邪魔な夜 野口一徳

俳句 選者 須藤火珠男

- 笛と路と八十路の朝の膳 福田フミ子
- 追分におわす地蔵や若葉風 福田美代子
- 岩魚つり先へ先へとカワガラス 高橋忠吉
- 自転車の風翻る単衣の子 渡辺ミチ子
- 訪ね来し友の笑顔や柿若葉 鈴木キ又子
- 弥生祭時を忘れてただ魅入る 小檜山忠
- 交付金さんざめく日や蜷汁 池田三夫

作家とペンネーム

作家などがペンネームを用いる理由には、①本名が平凡で印象が薄い ②本名が読みにくい ③本名を隠したい ④本名が好きではない、という4点が挙げられるそうです。しかし現代では、本名を用いる場合が多くなってきたり、ペンネームの2つの名前を使うには、各種の手続きや証明書の管理など、束縛が大きくなってきたからではないでしょうか。ペンネームの由来で、広く知られている作家に、尾張藩士であった父が軍人にしてうと受験させた試験に3度落ちた後、文学の道に進みたいと申し出た四迷。それに対し、「そんなことをやるような人間は、くたばってしまえ」と父に怒鳴られたことから、二葉亭四迷になったといわれています。



また、1人で複数のペンネームを持つ作家もいます。阿佐田哲也という作家は、昭和26年に雑誌の編集者となり、作家の家に原稿を取りに通っているうち、麻雀に誘われた翌朝「朝だ徹夜」の一言が浮かび、当時住んでいた「阿佐ヶ谷」にちなみ、阿佐田哲也を名乗りました。その後、井上志摩夫の名で時代小説を書き、昭和36年には、色川武大の実名でも執筆しています。図書館や書店で別の作家と違って手に取った本が、案外同じ作家の本であったりするかもしれませんね。好きな作家がペンネームを持っている場合は、その由来を調べてみることも作家の違った一面を発見するきっかけになり、楽しみが増えるかもしれません。図書館には、そんな楽しみを手助けする調べものための図書もありますので、一度のぞいてみてはいかがでしょうか。

短歌 選者 阿久津伸一

- 雨戸打つ深夜の風に寝ねがたく短き 未来のこと案じいる 高野恒子
- カリマンタン島の森より甦りくるわれら未生の原始の大气 名古屋佳子
- 八重桜手毬のごとく重たげに咲くを乙女心に見上ぐ 金田満寿子
- 苔むせる長谷寺の階登りつめ遙か由比ヶ浜に寄る波を見る 狐塚昭子
- 「疎開っ子」といぢめられに幼い日涙拭って「ただいま」を言う 本村晶子
- 炭を焼く煙のぼりし奥山も年経て元の山に近づく 湯沢登久子
- 阿修羅展の三像それぞれ人生の個性豊かな表情なせり 大森トミ子

作品を募集しています!

川柳・俳句・短歌のを募集しています。氏名(ふりがな)、住所、電話番号を明記して、ご応募ください。応募先及びくわしくは秘書広報課 広報広聴係 電話(21)5135・FAX(21)5109